

ディヤコニア



病院入院記

世界でいちばん小さな 礼拝をささげた朝

牧師 佐藤 千郎

主は彼の民に言った「見よ、わたしは穀物とぶどうとオリーブをお前たちに送り、飽き足らせよう」(ヨエル書2章19節)
イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子たちにお渡しになった。全ての人が食べて満腹した。

(マタイ福音書14章19・20節)

去る8月25日火曜日の朝、わたしと大沼昭彦理事長は、入院先の患者談話室で「日々の聖句」(ローズンゲン)のみ言葉にこのころを留め、共に祈りました。冒頭に掲げた聖句が、その日のみ言葉です。病院で迎えたその朝は、理事長とわたしとが同じ入院患者として、朝のひとつ

きを祈りの時として共に過ごすという「時」の不思議さに加え、「日々の聖句」によって届けられたメッセージの的確さに、働きの現場から隔離された場所でも、わたしたちは神の恵みの御手に裏打ちされた時を生きているのだとの実感を与えられた、特別な朝となりました。

わたしは自分の入院について、大沼さんに事前に話してはおりませんでした。大沼さんも、私が勤務している病院での手術であつたにもかかわらず、このことを口にされることはありませんでした。同時期の入院が分かつたのは、七月の中旬、二人が同席する委員会での席上で、議事が終了し、次回委員会開催日程の検討に入った日程調整中でした。それは、偶然の一致でした。

8月25日、入院後病棟で迎えた最初の朝、わたしは洗顔を済ませると、大沼さんのベッドサイドに向かいました。朝食までは時間があるので、朝の祈りの時を共にしたいとの願いからでした。ベッドサイドを訪ねること自体は、この病院でチャプレンをしているわたしの日常です

が、この時は、手術を前に祈りの友を求め、信仰者としての自然な振る舞いに近い感情でした。

大沼さんの病室に向かう途中に患者談話室がありますが、大沼さんはすでに談話室の椅子に座っており、わたしの姿を見ても驚くこともなく、むしろ、わたしを待っていたかのように迎えてくださつたのが印象的でした。

わたしたちは並んで座り、「日々の聖句」を開きました。大沼さんは片方の眼の手術を終え、保護めがねを着装中だったので、わたしがその日の聖句を読み、短くメッセージを語り、その後、交互に祈りの時をもちました。讚美歌を歌うことはありませんでしたが、私たち二人にとっては、賛美と感謝を分かち合う恵み豊かな「礼拝」となりました。

旧訳聖書のみ言葉には、御自分の民に必要なものを十分に備えてくださる神を覚え、新約聖書のみ言葉からは、現場にある貧しさをも祝福し、有り余るほどの豊かさを生み出してくださる主イエスを

示され、主に全てを委ねることの出来る
信仰者の幸いをここに留めました。

その日の午後、白内障の手術を受けた
わたしは、テレビや読書とは無縁の時間
を過ごすことになり、術後ベッドに横た
わっていると、自然と朝の祈りの風景が
甦ってきました。

勤務先で毎朝行われている礼拝で、わ
たしが担当の日には、必ず「日々の聖句」
を朗読し、聖書の言葉から受けるメッ
セージを話していますので、「日々の聖
句」は、日頃から合言葉（ローズンゲン）
であると共に、「わたしの道の光、私の歩
みを照らす灯」（詩編119編105）で
もありました。

今は入院患者となり、勤務先の日常業
務から離れたましたが、そのことによつて、
日常業務から離れる大沼さんのために神
が選び分けたれた「時」に導かれ、ここ
でもなお「日々の聖句」を届ける牧者とし
て、病院のベッドサイドへと遣わされて
いる自分を思わざるを得ませんでした。

大沼さんは、幼い子どもたちを預かる

保育園の園長だけでなく、この園の他
に、利用者さんの心身への細かい心遣い
が日に日に求められる複数の施設を運営
する法人の理事長です。現場で働く役職
員への信頼に揺らぎはないとしても、日
常業務を離れてベッドに釘付けられるこ
とから生じる不安が、解消されることは
無かったに違いありません。

そんな時、法人の理事を共に担う友が
祈りの友として側らに居り、祈りを分け
合う時の与えられた意味は、決して小さ
いものではありませんでした。その日の
聖句は、今日必要とする全てのものはす
でに神の御手にあり、神の御業を進める
ために不足しているものは何もないこと
を、私たちに想起させ、さらに、働きの
現場の貧しさもまた、神は豊かに用いて
下さるとの確信を強くし、穏やかに、新
しい朝を迎えることが出来ました。

私たちが理事（長）として関わってい
る社会福祉法人・ベテスタ奉仕女母の家
は、ドイツのヘルンフート兄弟団の
「ローズンゲン」を日本語に翻訳、「日々

の聖句」として発行している法人であ
り、その日のために選ばれた聖書の言葉
を合言葉としてここに留め、分かち合
い、歴史を刻んできた法人です。

従って、私たち二人の間で共有した確
信は、法人に連なる人たちと共有するこ
との出来た確信であつたに違いありませ
ん。さらに、これらの確信は、「ローズン
ゲン」（日々の聖句）を合言葉とする全て
の人たちと共に分かち合うことの出来る
信仰の実として、神さまが届けて下さつ
た贈り物：。

わたしは、その日の朝の、世界でいち
ばん小さな「礼拝」に、そんな思いを重
ねたことです。

ドイツ・ヘルンフートから発信された
聖書の言葉が、ドイツからは地の果てと
も言える横須賀の病院の一室まで、主の
御心と恵みを届ける器として用いられ、
ベッドサイドに神への賛美と感謝を生み
出した不思議さに、ご臨在の主イエス・
キリストを身近に感じ、驚きと感動を禁
じざるを得ませんでした。

（ベテスタ奉仕女母の家・理事）

ディアコニアの原点②

永遠の生命をつぐために

(善きサマリア人)

——ルカ 10…25

生きているすべての人間は死にたくない。やむをえずして死ななければならなくとも、その死が死でないことをこいねがう。そこからあらゆる宗教がうまれてきます。

ある意味で、はなはだ虫のよい、はたして真に宗教的であるかどうか解らない問をたずさえて、イエスにゆきます。すると彼は、これをムゲにしりぞけもせず、愛をゆびさします。彼にとつては、人間が死んだのちどこへいくかという空想的な問題にもまして、いま生命をうしなつた生きかたをしていることが悲しまれるからです。すなわち、誰も彼も自分一個のちいさな幸福のみを考えて、もつと尊い永遠のことを考えていない——そのとき、神を愛し隣人を愛する、その愛

こそは必要にして十分な治癒であるからです。

これを行え、さらば生くべし。こんな解りきつたことを、いまさら「そうですか、よく解りました」と引下がるのには、私共はすこし賢こすぎます。そこで敢て問題をつければ、その「隣人」の定義がききたいのです。というのは、その定義のしかたによつては、私共はまさしく隣人を愛しているからであります。ところが、そこに案外ふかい病根があつたのです。その、てれかくしに、うっかり口にした、その「隣人とは？」に……。



温めるものにのませ

イエスは、そこで、誰しもよく知っている、あの慈悲ぶかいサマリア人の例話

をおきかせになりました——荒涼たるエリコ街道の夕暮に、災難にあつた息もたえだえの一人の旅人をたすけたのは、同国人でも、宗教家でもなくして、平素犬猿の仲とみられていたサマリアの商人であつたという話を。

この実にするどい、容赦ない洞察を、ゆるやかな田園調につつんで、そつと私共にしめされることは、隣人というものは何所にもいるということですから。あえて、隣人とはだれか——と問うまでもなく……。

それなのに私たちが、その幾らでもある隣人をうけとらないのではないでしょうか？ ここで、隣人であるということよりも、隣人となることが問題とされねばなりません。隣人とはだれか——という問いにたいして、三つの場合をしめして、誰がその人の隣人となつたか——と応酬するのは、何だか問題のとりあげかたが喰いちがっているようですが、これによいのです。私たちの問いかたが正しくなかつたのです。

この例話は、私どもの理屈すぎな、何

も決断したからならぬ、殻にはいつたような心をよび起こしてくれませう。毎日毎日かぎりなく起ってくる偶然を、わたしたちが如何に神からの必然としてうけとるか？ 柔らかい憐憫の心をもって。慈悲を持って。結局、人間らしい自主性をもって、ふたたびこういう機会がまわって来ないものであるかのように。。

では、すべての人に親切にする、世話ずきである、おひとよしである——ということがキリスト者としてなすべき一切なのでしょうか？ もつと深い、祈り、懺悔、感謝、讚美のような、神にむかつてなされる信仰は無視されてもよいものでしょうか？ さらに、神を愛しようとするれば人を愛する時がなくなり、人を愛していれば神を愛することがおろそかになるといつた、私共の具体的な時間の問題はとうするのでしょうか？ これに対してイエスは何とこたえていらっしやるのでしょうか？

「汝も行ってその如くせよ」——それが、永遠の生命をつぐために取るべき手

段である。イエスには、なにか我々において二つの方向にみえるものが、一つにみえていたのではないのでしょうか？

私共のあいだでは、神学的な人は社会奉仕を軽蔑し、社会奉仕に熱心な人は神学を軽蔑し、かくしてどちらも片輪なものとなつて、祝福された成長をとげえませんでした。ところが、イエスは御弟子をまねかれて、教えを宣べ悪鬼をおいだす仕事をおさづけになり（マルコ3：14・15）、誰しも第一の誠としていた神への愛と、第二の誠としていた隣人への愛とを、「ひとし」（マタイ22：39）とおっしゃいました。

神奉仕と社会奉仕とが、別々のものでありながらひとつになつてからみあうときに、生きた証人としての生活があるのではないのでしょうか。神奉仕のほかに社会奉仕はなく、社会奉仕のほかに神奉仕はない、この神の

おいでください

Nun komm der Heiden Heiland



1. おいでください イエスさまはやく
きよしみはの ふしぎなあかちゃん
2. おいでください てんのくになら
かみのひとりご ふしぎなあかちゃん
3. おいでください ひとのかたちで
ひとをたすける ふしぎなあかちゃん

(文雄訳)



Advent - Advent - Advent - Advent - Weihnachten !



「デアアコニ」3号
1954年10月

愛がキリストをとおし、我々をつらぬき、助けをさけびもとめている現実の道ばたにあふれること以外に、永遠の生命をつぐみちもなければ、宗教の意味もない。イエスは何という思いきつたことをおっしゃつたものでしょう。(深津文雄)

50周年を迎えて

かにた婦人の村

施設長 五十嵐逸美

50周年記念誌の編纂

かにた婦人の村は1965年4月1日に開設しており、今年50周年を迎えました。ディアコニア活動拠点としての母の家の創設、社会福祉法人化、いずみ寮での婦人保護事業の開始を経て、地域に居場所を許されなかった女性たちが、互いに認め合い助け合う「コロニー」が必要であると深津文雄先生は考え、当時のいずみ寮の入所者の皆さんとこの思いを共有しました。やがて「コロニー後援会」が発足し、様々な方達からのご支援を受けて、ここ館山の旧海軍砲台跡地にかにた婦人の村が置かれました。

2014年度中より、この50年の歩みを記録として整理し、これまで運営を支援してくださった方々をお招きして、さやかな祝賀と深津先生の働きを覚える会を催したいと希望し、法人本部より予

算をいただきました。これにより、11月7日に「創立50周年記念式典・特別講演会」を開催し、記念誌を支援者の皆様にお渡しするための準備を進めてまいりました。

おかげさまで、10月28日に記念誌の製本が完了して納品され、11月7日の記念式典にお披露目するのを待つばかりというところまでこぎつけました。編集員になってもらった、天羽名誉村長、塩川成子職員、天良さ多子職員、出版業務の経験を持つ中村健二郎職員による粉骨碎身の編集作業が実を結んで、誰に読んでもたいていも恥ずかしくない、立派な記念誌ができたと自負しております。



これだけの紙面を作れたのは、深津先生を始めこれまで働き人として関わった

方達が、きちんとした記録を残してくださったことが大きいと思います。

例えば資料として参照した初期のディアコニア誌には、深津先生や、母の家の事業に参画したシユベスター達の思いが熱い情熱と共に誌面にほとばしっており、法人設立時の理念を振り返る上で貴重な資料であることを私自身強く感じました。

過去の資料の中には先人の思いが詰まっています。今回発刊した50年誌にも、これまでかにたで働いた人たち、入所者の方たち、支援してくださった方たち、そして今働いている、今入所している人たちの思いがほとばしる誌面を作ることができたのではないかと思います。

記念誌（A4版120頁）をご希望の方は、送料300円分の切手を「かにた婦人の村50周年記念誌係」宛に送って頂ければ、お一人様一冊に限り送付させていただきます。お問い合わせが殺到した場合、発送まで時間がかかると思います。何卒ご容赦願います。

建替えの計画について

2014年度に土砂災害危険地域の指定を受けて以来、建て替えについての議論を施設内部と、法人内の「かいた問題検討委員会」にて継続的に行っているところです。元々、国から格安で払下げてもらった旧海軍砲台跡地の山地を削って何か所か平地を造成し、そこに居住棟や管理棟、浴場棟、食堂棟、作業棟を建設してあったのですが、現在の建築基準法では建直せない場所もあり、第一案では鉄筋コンクリート5階建ての集約的な建物を考えてみました。ところが、単純に見積もっても15億円という巨額な計画となり、見込める補助金3億5千万円程度を考えると、実現は不可能ということで、現在第二案を策定中です。

建替えのコンセプトとしては、これまでの生活寮の特徴であった「顔の見える暮らし」「共に作り上げる暮らし」が可能なおープンスペース重視の部分を受け継ぎつつ、「プライバシーの保護」「一人の空間の確保」も取り入れたいと考えています。というのは、最近入所される方に強

迫性障害や、統合失調症など精神疾患をベースに抱える方が多く、そういう方には、一人でゆったりと過ごせる空間が欠かせないからです。一人になれるが、一人ぼっちにはならない。交わりも維持しながら、自分の安心スペースもある。そんな建物ができることを願っています。

この建築計画が固まり次第、建築資金に足りない部分を補うための寄付金を募る予定でおりますので、本誌読者の皆様からも是非ご協力頂けるよう切にお願い申し上げます。

記念誌にも書きましたが、地域で問題児とされ、居場所が無かった女性達が、かいた婦人の村では安心して生活されています。本当は地域に居場所があるべきなのです。障がいには本人にあるのではなく環境にあります。個性ある方たちが楽しく生活できる地域であれば、かいたは必要ないでしょう。

しかし、現実には厳しく、地域からはじき出された女性達が、今もかいたに新しく入所されてきます。これらの女性達が

安心して生活し、地域生活に再びチャレンジできる力を得る場所として、かいた婦人の村は必要とされています。このことを皆様にも覚えていただき、引き続きご支援して頂けることを、この誌面をもっとお願いいたします。

今年隔年実施の一泊旅行の年にあたり、山梨ブドウ狩り、岩手県盛岡市周辺観光、東京デイズニールランド、南房総の温泉ツアーの4コースに分かれて、元気に出かけてきました。旅先で撮られたどの写真にも笑顔が溢れており、虐待や暴力、差別で傷ついてきた方たちの心の回復が見取れて、嬉しい限りです。

この方たちが二度と寂しい思いや辛い思いをしなくてすむ人生が神様から与えられることを日々祈りながら、寄り添い共に歩む支援を、職員一同結束して行っていききたいと思っております。

最後に、皆様の生活にも、平安と安らぎが与えられますようお願い申し上げます。50周年を迎えての決意のご報告とさせていただきます。

ベテスダの日に寄せて

いずみ寮

施設長 横田千代子

2015年9月19日(土) 午前11時からいずみ寮にて「ベテスダの日」が開かれました。当日は、残暑の余韻を漂わせる日差しの中、吹く風にどこか秋の気配が香るような恵まれた天候でした。

お迎えの役割を担った利用者の方々、初めて出会うお客様に緊張をしながらも、心溢れる笑顔でのお迎えが出来ました。

お迎えのご挨拶

開会にあたって、一言ご挨拶をさせていただきますました。

「今日は、ベテスダの日にいずみ寮にようこそお出で下さいました。この時が神さまからの祝福と恵みの中に置かれ、シユベスターを支えていらした祈りの友の皆様、関係者の皆さまにとりましても、懐かしい出会いとなりますことを心

よりお祈り申し上げます。

隣接しております本館にいらっしゃるシユベスター、ご高齢になられ本館を離れていらっしゃるシユベスターの方々にとりましても1年に一度のこの日が豊かな交わりの時となりますよう重ねてお祈り申し上げます。



しても、施設の成り立ちを振り返る貴重な時間であり、シユベスターたちの積み重ねられた歴史的働きに感謝する時でもあります。

この出会いの時を働きの糧とし、女性支援の活動に一層力を注ぎ、頑張りたい

と思います。」

深津文雄牧師の教えに導かれて

マタイによる福音書18章10節〜14節
迷い出た羊のたとえ

ベテスダの日に備えて選ばせていただいた「聖句」です。深津牧師が私たちに教え、導いてくださった『いと小さき者』こそ見捨ててはならないという、大切なみ言葉です。長年の婦人保護施設の仕事を通して、励まされ、勇気づけられてきたみ言葉でもあるのです。

私たちスタッフ一同が女性支援を思うとき、「自分で選ぶことのできなかった人生でありながら、彷徨う中で取り込まれ、居場所を失い、ここに辿り着く女性たちのなんと多いことか」そう思わずにはいられません。

私たちには、この女性たちを支援するには力不足かも知れませんが、いずみ寮で出会い、共に暮らし、心を育み、関わったこの人々こそを見捨てないこと、そして見守り続けることが神さまから課せられた責務だと思います。この細やか

な育みが、いつかきつと社会を変える大きな働きにつながって行くと思えます。

法律の改正を…居場所を失った女性や子どもひとりひとりのために

婦人保護施設は「売春防止法」「DV防止法」を根拠法にしている施設です。今、売春防止法の改正に向けて大きな動きをしております。何故、売春防止法ではないけないのか？ 売春防止法ではどうして対処しきれない大きな社会問題があるからです。それは「暴力」です。暴力の問題が、社会に蔓延し、その根っこにあるのは支配と抑圧とジェンダーの問題なのです。

2001年にDV防止法が制定され「暴力被害」の問題が可視化され始めたのですが、暴力は一向になくなりません。女性の被害には、同時にその中に、戸惑い逃げ惑う子どもたちがいます。暴力から逃れた母親と子どもは生活すべてが奪われ、居場所をなくすのです。

またさらに、この女性や子どもたちを苦しめているのが性暴力や性虐待です。

性暴力・性虐待の被害は心に大きな傷を残します。その回復には沢山の時間が必要で、今、必要なのは新たな法整備と法律で守られた「性暴力被害者回復支援センター」であり、性被害には専門的な治療が必要なのです。暴力によって歪められ、虐げられ、さげすまれ…心の中はぼろぼろなのです。このひとりひとは、ふさわしい法律によって社会的に守られるべき被害者だと思います。新しい法律ができることで、女性支援の道がなお広がっていくことを願っています。縦割り行政から「手をつなぐ女性支援法」を目指して歩みたいと願っています。神様は道を示されていると信じます。微力な働きですが、どうぞ皆様ご支援をよろしくお願い申し上げます。

シユベスターが一堂に会して

今年の「ベテスタの日」で、何より嬉しく思いましたのは、年々ご高齢になられ、出席も案じておりましたシユベスターの皆さんが揃われたことです。祈りの友の方々、来客の皆様もさぞ、お喜び

になられたことでしょう。

残念ながら体調不良のために植木道子シユベスターのご出席がなりませんでしたが、健



康を案じておりました桜庭歌子シユベスターをお迎えでき、ホームから山下操シユベスターもお迎え

しました。シユベスターの皆さんが並べられた時、胸に熱いものが流れました。お客さまのあちらこちらから一斉にカメラのシャッターがきられました。次回にはシユベスター全員が揃われますよう祈っております。

「ベテスタの日」の大きな意味が示され、法人で働く者も感謝の時間を与えていただきました。主に祈りをささげて。

茂呂塾創立80周年を迎えて

理事長・園長 大沼 昭彦

創設者深津文雄牧師が茂呂の地に家族

と共に居を構えたのが1935年11月7日。4日後の日曜日には11人の子ども達が集まり、茂呂塾児童団が開始された。

(茂呂塾五十年誌) 茂呂塾保育園は、この児童団の発足に起源をさかのぼることが出来、本年80周年を迎えることになった。

地域の方々に感謝

深津文雄は、茂呂塾児童団というキリスト教による日曜学校に集い来た子ども達に、聖書を中心にした話やキャンプなどの共同生活を通して、人間性の涵養や人格育成を始めた。その後中学三年から社会人までの塾生会も出来たとある。

この草創期に深津文雄の感化を受けた多くの地域の子ども達が、長じてリーダーとなり、地域の発展に貢献したことは言うまでもない。

茂呂塾保育園が地域に支えられて80年

の歩みを重ねることのできた大きな力
は、児童団・塾生会に学んだ多くの方々、
そのご子孫や関係者の皆様であり、地域
の方々により感謝を申し上げたい。

幼稚園から戦時託児所を経て保育園へ

茂呂塾児童団に幼稚園が併設されたのは1938年4月1日。1944年6月より戦時託児所に変わり、戦後、再び幼稚園に戻り、児童福祉法の制定に伴って1947年保育園となった。

この間の大変な状況とご苦労については、矢口千代先生(深津文雄の妹君・初代主任保母)が、茂呂塾五十年誌に詳細に書いておられる。この中に、母上深津ジョウ様が子ども達のお八つ・給食・クリスマスケーキ作り等にご尽力下さったことが記されており、今日の茂呂塾の食文化の原点を、知ることができる。

幼児期に最良・最善の環境を

深津文雄は幼児期に最良・最善の環境を提供することをモットーに保育園を運営し、給食や行事等保育全般にその精神

が反映されている。

また、一人一人の個性を大切に幼子の成長を支える保育の重要性を認識し、キリストの愛に倣って保育園で働いていた奉仕女の仕事ぶりや保育士・職員の働きは、保護者の皆様から深いご理解とご支援を得て今日まで継続し得ていることは大変嬉しいことである。

子ども達の成長の場・園舎の整備は、木造園舎落成・献堂に始まり、2013年の新園舎増改築まで5回行われた。地域の方々・保護者・卒園生・関係者の皆様のご支援、公的補助金により進められ、国有地の無償貸与により広い園庭が備えられる等最善の保育環境が実現している。

神様のお導きとお支え、茂呂塾に関わって下さった皆様に心より感謝し、新たな一歩を踏み出したい。

- ・ 1938年木造園舎落成・献堂
- ・ 1955年ブロック園舎増築落成
- ・ 1968年新園舎(A棟)落成
- ・ 1995年ブロック園舎解体・新園舎(B棟)落成
- ・ 2013年A棟園舎解体・増改築園舎落成

「その齢になってみなければ解らない」とよく言われますが、そのことが身にしみて解るようになりました。足腰の動き難さ、耳は遠くなり、目は霞み、歯まで脆くなって、僅かな事で欠け、嚙むことも不自由になって、はじめて自分より先を行く方々の辛さを思い、いかに私は思いやりに欠けていたかと反省しています。

「わが身をつねって人の痛さを知れ」——これができたら、いじめも虐待も戦争もなくなるでしょう。

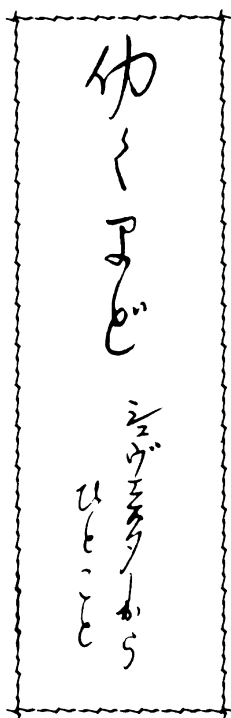
*

眞山知恵子

今年は二年ぶりに「ベテスタの日」に出席することができ、祈りの友の皆様や、シユヴェスター歌子にも逢えて、とても嬉しい一日でした。でも、私はホームに入ってから髪を短くカットして居るので、頭に被ったハウベが落ちそうで心配でしたが無事に終わり安堵しました。帰りに私は車椅子ですが、祈りの友の中川様が送って下さり、近くて良いところだと驚いて居られました。有難い事です。山下 操

或る日の新聞より、「人間の価値は、何が出来るからではなく、存在そのものにある。」高齢者、重病人、様々な辛い状況の中にあつても、生きる力が備わっているのです。

秋の日ざしの中で美しく紅葉していく自然に神様の数え切れない恵みを頂いて今日も元気にすごせて感謝！細井陽子



遠き日の淡き思ひや秋ざくら

云ひ難きことば秋愁の雲流る

毛糸編む始め終わりを綾なしぬ

尺きるまで燃え尽きるまで冬紅葉

植木 道子

「創立50周年記念」の年を迎え、記念式典を11月7日に、翌8日の聖日には記念礼拝を計画して準備中です。その前に膨大な「記念誌」作成に編集委員の一人として関わり、創設前史からの年表に現わされる「創造の歴史」と強力な支援の手に圧倒されています。天羽 道子

*

相浜ガーデンに来て3年になりました。こころ

暖まる介護をうけています。かにたからホームに入っている3人の人たちとお茶の時間には、かいたの話をして楽しんでいます。桜庭 歌子

*

つい最近まで猛暑などと取上げていたのにもう虫の声に、涼しさを越して肌寒さを覚える季節を迎えます。時の経つことの早さにせかされます。先号でエリザベット姉の様子を知りましたのに、いまは病の床に臥せておられるとのこと。平安を祈り続けております。小川 都代

おしらせ

★献金ありがとうございました。

(7～10月分)

ひらばやしまさき 宮田光雄 久遠キリ
スト教会・中平安子 佐藤元紀 大沼昭
彦 明治学院(中学校)／東村山高
等学校(酒井忍 故茂木節子姉相
続財産分与小口晃生 天門教
会 奥田愛子 加藤明彦 大沢真
理子 田浦教会エレミヤ会
広瀬公男 五十嵐順子 藤巻契
司 今井佳代 (敬称略)

★計報

阿部昭子姉(細井陽子の祈りの友)が八月二日に、加藤薫姉(みんなの祈りの友)が九月五日に、名取道子姉(小川都代の祈りの友)が十月十七日に、召天されました。長い間のお支えとお交わりを心から感謝し、ご家族の方々の上に天父の深い慰めと平安をお祈りいたします。

★新しく祈りの友になられた方のお名前を、感謝をもっておしらせいたします。

15 小川都代のため

H 伊藤眞子姉

〒183-00014

府中市是政4丁目1-1619

電話 042-207-5249

★2016年版「日々の聖句」ができました。本部または、お近くのキリスト教書店でお求めください。

電話 03-3924-2238

FAX 03-3921-4962

★日々の聖句・日曜日の欄に載っている「ドイツ聖歌集」は、かいた婦人の村で、お求めになれます。

電話 0470-22-2280

FAX 0470-24-1562

★かいた婦人の村創立50周年記念式典

日時 11月7日(土) 13～15時

懇親会 15～16時

会場 千葉県南総文化ホール(館山市)

記念講演 阿部志郎先生

「キリスト教と社会事業

——深津文雄が求めたもの」

★茂呂塾保育園創立80周年

記念礼拝&大人のためのコンサート

名倉誠人(マリンゴ)板橋由紀(ピアノ)

日時 11月28日(土) 13～15時

会場 茂呂塾保育園ホール

電話 03-3956-2525

★編集後記

かいた婦人の村と茂呂塾保育園の記念事業が続きます。日々のお祈りのうちに
お覚えください。

クリスマス献金のお願いを、別刷りで
同封させていただきました。よろしくお願
いいたします。(佐藤)

二〇一五年十一月十五日発行

発行人 大沼 昭彦

編集責任者 佐藤 元紀

印刷所 (株)印刷センター

発行所 〒一七八-〇〇六一

東京都練馬区大泉学園町

七一七-三〇

社会福祉法人ベテスタ奉仕女母の家